

<会の流れ>

郡山由美子さんが総合司会をしました。郡山さんは、拡大世話人会でも議長をしてくれています。

田村区医師会長の挨拶に次いで会は本題に入りました。

最初に発表したのは、リヒテルズさんの公演を聞くにあたり、私たちが到達した地点を確認する話でした。例の厚労省が示している地域包括ケアシステムを説明している「植木鉢の葉っぱに光が当たっているように描かれているのは何を意味するのだろうか」と云う伊藤大樹医師のお得意の話です。

<伊藤新一郎医師の座長 挨拶>

私は昨年、市民シンポジウム「いっちゃん座」の練習をさぼり、1月間のピースボートクルージングに参加しました。ピースボートでは有名人の講演会があるのが恒例です。先生はリスボンで乗船され2日間にわたって公演されました。オランダの低学年教育の目標は、知識技術の習得ではなく、自己表現・自己主張の訓練であり、同時に自分とは違う者の受容であるとのお話に、目から鱗でした。偶然にもルアーブルで下船する先生と待合室で長話をする機会があり、同じ福岡出身であることから、話が弾みました。

今年3月、オランダの国政選挙があり、ポピュリズムをいかに克服するかと云う選挙で、世界中が注目していました。何と80%をこえる投票率でみごとポピュリズムを克服しましたが、日本とあまりにも違う投票率の高さの驚き、これを導き出したのは、恐らく教育の差、社会の成熟度の違いだろうと感じました。

この感動が今回の講演会の提案理由でした。今日のお話の中から明日の私達の活動にピリットしたヒントをもらえたらと期待しています。

<リヒテルズさんの講演>

資料参照

<中里 里香 の「利用者と家族の意思が食い違った事例」の紹介>

日本の深刻な事例が紹介されましたが、野林弁護士からさらに一事例にとどまらず、広く日本人の考えの根幹を揺さぶる問題であり深刻に考えなければならぬ事柄であることが強調されました。

<質疑応答>

香住ヶ丘ケアプランセンター 吉住ケアマネ、福岡みらい病院 佐久川医師、たたらリハビリテーション平田院長などから質問・感想があり、最後に九州大学付属病院麻酔科教授（緩和ケアチームリーダー）から安楽死に対する質問がありました。安楽死を望むかなりの人は、身体の痛みではなく人生に対する絶望や精神的な苦痛から安楽死を希望しているが、オランダの実態はどうかとの質問がありました。

オランダは安楽死を認めた国であるが、望めば得られるものではなく、厳しい基準に耐えたものだけその執行者に刑罰を科さないというもので、精神的な苦痛を逃れるためでは認められないとの説明があり、会場の皆の認識を新たにしました。

<東区保健福祉センター岩永所長の挨拶>

今後の皆さんの活動が発展するよう期待が表明されました。

<茶話会・食事会>

一部の人は、講演会後も話を聞く機会があり、オランダの理解を深めました。

以上